



ピッポ新聞

2009
12
No.248

年間購読料 (送料込み) 1500 円

編集・発行 伊藤俊男

子どもの本専門店

〒424-0886

静岡市清水区草薙1-6-3

ピッポ

TEL & FAX

054-345-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>

E-mail itoh@pippo.co.jp

骨董市

「君はまだ脇が甘い」

その4

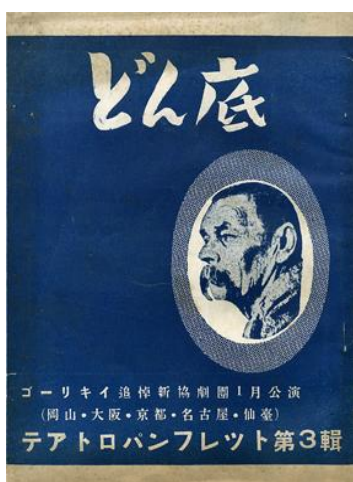
少し間があいてしまいましたが、骨董市で手に入れたゴリキの追悼芝居の「パンフレット」の後から、今回は書き始めたいと思います。

ぼくがなぜあの小汚い「パンフレット」に目をつけたかというところ、まったくの個人的な興味からでした。パンフレットの表紙には「どん底」とあり、サブタイトルにゴリキ追悼新協劇団(「新劇」好きな方なら戦前のこの劇団の名は、見逃せないではありませんか。このパンフレットはゴリキ没後の翌年)と書かれていた。さらにページをめくると、目に飛び込んできたのが、村山知義、杉本良吉などの執筆者の名前でした。かつてプロレタリア文学をかじったことがある者には懐かしい名前だったのです。特に村山知義の名前は、子どもの本屋を初めて福音館の『おなかのかわ』(瀬田貞二・作)や『しんせつなともだち』(君島久子・訳)などの絵本の画家として、また古本屋をはじめてからは「子供之友」(婦人之友社)の挿し絵画家として出会っているのですから興味が高まるというものです。その村山知義がここでは、「どん底」の演出家として文章を書いているの

です。

幸いなことに、骨董市ではこの「どん底」のパンフレットに興味を抱いたのは、ぼく以外にはいなかったため、300円という安い価額で落札できました。

「どん底」のパンフレットは、こんな経緯で手に入れたわけですが、多分こういう面白い方は古本屋的ではなく、一読者としての買い方に近いのではないのでしょうか？ですが、読んでしまっただ後は、そこは古本屋ですから、つぎには古本屋的な好奇心が頭をもたげてきたのです。それは、このパンフレットが古本屋の市場では、一体どんな評価をされるのだろうか？という興味です。



『どん底』のパンフレット昭和十二年

ナツプ後援・内外出版) などというプロレタリア文学隆盛のころの出版案内パンフレット(こちらにも興味をひかれます)など数葉を一緒に透明のビニールの袋に入れて出品したのです。このときは、他にもいろいろ出品をしているのですが、気になるのはゴリキのパンフレット

そこでぼくは、神田の市場にこれを出品してみようと考えたのです。このパンフレット一枚でなく、このとき付いていた「総合プロレタリア芸術講座」(秋田雨雀・江口渙・監修

トのことばかりです。一体いくらもの値がつくのだろうか？期待は膨らむばかりです。ときどき様子をつかがいにくいのですが、封筒の中は空のままです。その都度ガツカリです。誰も入札していません。でも、開札の間際になるとけっこう入札者が出てくることも多いので、ささやかな期待を持ち続けたのです。そうこうするうちに開札時間がきてしまい、パンフレットが置かれている場所がテープで封鎖されてしまいました。みているかぎりでは、とうとう誰も入札してくれませんでした。

ぼくの気持ちは「そんな馬鹿な！おめーら、この面白さ、資料的価値がわからぬのかよ」とゆうものでした。だがしかし、これはやはり、ぼくの一方的な思い込みだったのでしょうか？神田の古書市場は、この戦前の芝居のパンフの価値を認めてくれなかったのです。

市場の評価の誤り？

「しかしな！市場（古本屋）が評価を誤ることだってあるのではないだろうか？」、諦めきれないぼくは、「どうも考えるのです。」

「そうだ！きつと、出品するジャンルを間違えたのだ。だから評価してもらえないのだ。今度は資料会に出品してみよう」。

以前にも書きましたが、神田の古書市場は、月曜日から金曜日まで毎日ジャンル別の市場が開かれるのです。

骨董市で三百円で落札したパンフレットが、神田で評価されることを夢みて未だ諦

めきれないので。それでね、まだ件のパンフは手元にあるのですよ。だれか興味ある方はごさいませんか？お譲りします。しかし、ぼくの評価は安くはありません。

ことほどさように、ぼくには、古書市場は面白いところなのです。先日は、これとは全く逆の経験をしました。次はそのことを書いてみます。

十月の終わり、ぼくは御前崎の方に古書の買い取りに行きました。そこで千冊近い本を売っていただいたのです。その半分以上は和綴じ本で、江戸末期から明治・大正時代の本が中心です。声を掛けてくれた方のおじいさんの蔵書で、おじいさんは明治の終わりに早稲田大学で学んだ方のようにです。そのときの本が戦争もくぐりぬけ、百年近く経って、ぼくの手元にとどいたわけです。

書棚にある本を段ボール箱につめていくのですが、本と本の間には多量のナフタリン（防虫剤）が置かれていました。その効果のためか、虫喰いの本もありますが、保

存状態は良いものが多いようです。箱に詰めながら、時々目にする森林太郎（鷗外）だとか、永井荷風、島村抱月などの名前を散見するたびに、ぼくの興味は募るばかりです。でも和本の大半が漢文で、中には変体仮名でつづられたものもありますから、その多くは理解できません。これはこれで、一体どんな本かを時間を掛けて調べるのが楽しみです。

用意していった段ボール箱15枚では足りなくなり、そのお宅にあった段ボール箱にも詰めたのですが、それでも入りきらなかったもので、とうとう車に直に積み込んだ次第です。本は助手席にまであふれました。これを店に運んでもどうしようもないので、借りている倉庫に運び入れ、少しずつ店に運んで調べるのです。

最初に店に運んだのは雑誌類と、和綴じの本など段ボール2箱分。この雑誌は、最後に「雑誌なんかもいいですか」というので、「どんな雑誌ですか？」と期待をして聞いたら「早稲田文学なんかです」という。「もちろんお願いします」と言ったら、2階から下ろしてくれたのです。それは30〜40冊あったのですが、その中の1冊を開くと「坪内逍遙」なんて名前が散見される明治時代の「早稲田文学」でした。これを帰ってから、調べるのが楽しみだったのです。

「いの一冊」に雑誌を調べる

そこで、この雑誌類を一番に調べることにしました。

結局「早稲田文学」は6冊しかありませんでしたが、いずれも明治40年代のものでした。他の雑誌は明治、大正の文芸誌や思想誌などが訳20冊ぐらいと、後の半分は、雑誌ではなく最初はなんだかわからなかったのですが、ネットで調べた結果、国会図書館の蔵書の中にその一部を見つけて、和綴じ本の表紙などを改装した「東京専門学校」と「早稲田大学」の明治時代の講義録

であることがわかりました。これはこれでひとまとめで出品することにしました。

ところで、この雑誌の束の中に3冊だけ雑誌ではない本が混じっていました。装丁からいうと教科書のような感じの本です。

1冊は『恋と刃』、作者永井荷風とあり、奥付には明治三十六年とあります。どうやら、永井荷風の初期のころの作品のようです。

折り畳みの口絵も状態はきれいです。「短刀を持った男と刺された女性の絵」で、ちよつとどぎつい内容で、ぼくが知らない作品です。ネットでタイトルを打ち込んでも出てきません。はたして本当に荷風の作品なのか？などと疑問も湧いてきます。(ただただぼくが無知なだけなのですがね)。

そこで口絵の画家の名前をかるうじて読みとって、こちらからもアプローチしてみました。この画家(名前は忘れた)は、明治・大正期に新聞や雑誌の挿し絵で活躍した画家だと判明しました。

国会図書館にも無い本？

そんなこんなの中に、国会図書館の蔵書の中に「恋と刃」が見つかりました。しかし単行本としてではなく、荷風全集の中に納められていたのです。これで、荷風の作品であることだけは確かめることができました。

しかし単行本としては、国会図書館にも蔵書されていない？

これはひよっとすると、掘り出し物かも

しれない？などと期待が高まります。

後の2冊は上下巻のもので、こちらはすぐに見つかり、菊池幽芳の『若き妻』で明治三十五年の初版本でした。希少性はあるようで、どのくらいの値段か、相場も知ることができました。

で、この2点を含め15点を明治古典会という市に出品してみようと考えたのです。

これまで神田の市場への出品の経験は、「洋書会」と「資料会」と「中央市会」だけだったので、明治古典会は初めてです。

この市会は近代文学の初版本や作家の書簡や生原稿、肉筆原稿・和本・掛け軸や錦絵・古い学術書などをあつかう市で、ぼくなどは高額本の市という認識で、敷居が高かったのです。

でも今回は、永井荷風の初版本がどんな評価をされるか知りたかったのです。

この2点と、雑誌以外はすべて和本です。から15点は、ダンボール一箱に収まりました。和綴じ本の中には『審美新説』(森林太郎)、『福沢文集上下巻』(福沢諭吉)、『新訳 魯敏孫漂流記』(ロビンソン漂流記・明治19年第十四版)などというのも含まれていきますから、これはこれで楽しみです。

明治古典会の当日、もちろん神田まで出向きました。さて、ダンボール一箱がいくらの値段が付くのか楽しみです。

明治古典会は、ぼくがいつも出入りしている中央市会と雰囲気が大分違いました。中央市会では、本がうずたかく積まれてい

て、その量は、いつだってぼくを圧倒するのですが、ここではそれはあまりありません。

どーんとまとめて何本口という出品よりも、1冊や2冊での出品が多いのです。壁には掛け軸がずらりと掛けられて、台には錦絵などが置かれています。もちろん全集物なども多くあります。

ぼくの15点が、何処に置かれているか確認することにしました。出品物が3階と4階に展示されているのは、中央市会と同じです。3階を見ましたが何処にも見あたりません。4階で最初に見つけたのが、「早稲田文学」などの雑誌の一束(16冊)です。どうやら15点すべてが4階に展示されたようです。

期待の永井荷風は近代文学関係の本が並べられている場所にありました。もう1点の『若き妻』も近くにありす。見たところ、まだ誰も入札していませんでした。ひと回りしたところで、また永井荷風を見に行きました。が札が入っていません。ちよつと心配になりました。

そこで、ぼくが出品した15点を全部見て回ることにしました。入れ札を確認できたのは早稲田文学と早稲田大学の講義録だけで後の和本はいずれも入札者がいません。果たして入札してくれる人は表れるのでしょうか？心配は募ります。そこで一計を案じて「永井荷風」に、ぼく自身が札を入れることにしました。

といつても、出品者が自分の本に「いくらで買う」という値段を書くことはできま

せん。可能なのは止め札を入れることです。止め札とは「これ以下では売りませんよ」という、金額を書いて入れるのです。このときぼくは「1万円」と書いたのですが、気持ちはずっと、もつと高値で売りたいのです。入札者がいないのに止め札を入れたのは、これが呼び水になってくれればと願うことです。

自分の評価と市場の評価は大違い！

他の人の出品物を見て、入札したり、出品物の浮世絵などをみたり、顔見知りの古本屋さんと話したりして時間をすごし、時々自分の出品の入札状況をチェックしたりします。

先程の「止め札」の呼び水が効いたのか（そんな分け絶対あり得ないけどね）、永井荷風の入札が、見に行くたびに増えているようです。他の出品にもボチボチ札が入っているようで、少し安心しました。でも近代文学の初版本を買おうという古書店は限られていますから、封筒が溢れるような入札はありません。

開札は3階から4階に移ってきました。ぼくの15点はいずれも部屋の真ん中から終わり頃にかけて展示されています。

最初に開札結果が分かったのは、「早稲田文学」の束で9千円ほどの落札価額で、まずまずの結果でした。ちよつと期待をしていた明治時代の早稲田大学の「講義録」は最低額の2千円でこちらは期待はずれで

す。

なぜ落札価額が分かるのかと言えば、落札された本には、最高価額の入札札がテープで留められていくからです。このように措置された本は、落札者は引き取ることができるのです。

今回出品した15点のなかの、11点は和装の本です。そのうち5点には値段が付きませんでした。なかでも期待していた『福沢文集上下巻』や『新訳 魯敏孫漂流記』も空振りで、かろうじて鷗外の『審美新説』が3千5百円という値段でした。

いよいよ近代文学の改札結果が、分かりました。「恋と刃」の札には、1万3千五百円という数字が丸で囲まれています。

この結果に、大きな落胆を感じました。ぼくの胸算用では、3〜4万円はいくたろうと思っていましたからね。もうひとつの『若き妻』の方は2万4千円の値が付き、こちらは思ったより少し高目でした。

そうこうしているうちに、場内の放送で正式の落札結果が読み上げられたのです。この明治古典会では、結果のでた順番に放送でも、会場の人にそれを知らせてくれるのです。

何気なく耳にした「『恋と刃』 十万三千百十円で××書店さん」と聞こえたのです。一瞬ぼくの聞き間違えかと思っただけです。最近ぼくは少し耳が遠くなったようで、よくそのことを、カミさんに指摘されるものですからね！

そこで、急いで落札ふだの再確認に展示

場所まで戻りました。よく見れば、そこに書き込まれていた数字は、103110円でした。1と3の間の0を見落としていたのです。ぼくは最近、目も悪くなっているようで……。

ぼくには、嬉しい見誤りだったのです。

あの『恋と刃』をネットで時間を掛けて調べた結果、初期の頃の永井荷風の初版本であることが分かったわけですが、市場でいきなり、あの価額を付けることができる神田の古書店には感服しました。

にわか古本屋と伝統ある神田の古書店との歴然とした差を、身をもって経験させられました。

ぼくは実は古本屋として、近代文学あたりを今後手がけていこうかと、ほのかな思いを抱いていたのです。しかし、何十年と、この道を手がけてきた神田の古本屋に伍していこうなど、如何に無謀なことか思い知らされたのです。

欲しいのは時間、でも今更ね！

さて、今回の二つの出品で、ぼくは改めて、「J屋さんの「君はまだ脇が甘い」という言葉を噛みしめると同時に、古本屋の世界の深さに、ますます魅力を感じると同時に、せめてあと十年早く古本屋をはじめたいればという思いに駆られます。

今のぼくには時間という障壁が大きく立ちただかっているのです。十数年前、子ども本の翻訳家であり、評論家の清水真砂子氏の講演を聞いたとき、たしか「私には

時間が足りない」というようなことを言っていたように記憶しています。そのときは、「何を偉そうに、時間が無い」など他人様のまえで公言することか、と反発を感じたのですが、今こそ、その意味が理解できるのです。

もちろん清水氏のような価値ある仕事のための時間ではなく、ぼくの場合はどちらかといえば、個人的な趣味のためにですから、こなところに清水氏を引き合いに出すのは失礼ですね。

もう一つの趣味の登山も、このところ無沙汰です。あーあ、もっと時間が欲しいけど、今更ね！
(終わり)

ねー、この本読んだ

『クリスマスのてんし』(エルゼ・ヴェンツィ・ヴィエトル・作 斎藤尚子・訳 1785円 徳間書店) クリスマスを前に、

10人の天使が空から舞い降りてきて、それぞれこまった人の手助けをします。1番目の天使は雪の中で飢えている動物たちに餌をやります。2番目の天使は、



・・・一部仕掛け絵本なっていて、後ろ向きだった天使が、場面ばめんで、こちらを向きになって顔を見せてくれます。

『エリーちゃんのカリスマス』(メアリー・チエルマーズ・作 おびかゆうこ・訳 840円 福音館書店) エリーちゃんは、もりからモミの木を切つてきました。みんな



年代のアメリカの絵本で、ちっちゃい子で

なでクリスマス飾りを出してきて飾りました。でもだいじな星の飾りが見あたりません。エリーちゃんは森へ探しに行きました。50



『わすれられないクリスマス』(マウリ・クンナス・作 いながきはるみ・訳 1890円 猫の言葉社) オンニのパパとママは、ありとあらゆる物

をオンニに与えます。でもオンニは喜ぶどころか、無感動でつまらなそ

う。クリスマスプレゼントも山のように買ってもらいました。ところが、イブの夜不思議なことが起こりました。庭には廃材の山が、これを見たオンニは大喜び・・・。オンニにはわすれられないクリスマスになったようですが、子どもの気持ちって複雑ですね。クンナスの絵本の魅力は、それぞれの画面の絵が細かく書き込まれているところで、絵を読む楽しさにあふれています。

『どうぶつサーカスはじまるよ』(西村敏雄・作 840円 福音館書店) こどもとも絵本 つぎつぎにサーカスの舞台に動物たちが出てきて、お馴染みの曲芸を披露する。最後にサル君の空中ブランコの予定だったが、サル君



は怪我のためできません。変わりに観客の中からブタくんが・・・。単純に繰り返す展開ながら、描かれているユーモアを含んだ絵とともに安心感の持てる絵本。

『ちびフクロウのぼうけん』(ノラ・スロイエギン・文 ピルッコ・リーサ・絵 1360円 福音館書店) 春が近づいたゆたかな森の木の上で、フクロウの親子が暮らしています。ちびフクロウは木の下の地面にはねる生き物に興味を

ひかれます。お母さんの隙をつかがって、



木の下に降りていきました。初めて出会ったウサギです。ちびフクロウの冒険がはじまります……。フィンランドの自然豊かな地で暮らす作家と画家の手によって、豊かな自然の香織が漂ってくる絵本。

『かしこいモリー』(ウォルター・デ・ラ・メア・再話 エロール・ル・カイン・絵 中川千尋・訳 1365円 ほるぷ出版) イギリスの昔話。3人姉妹がもりのなかで迷って、人食いの大男の家に迷い込む。末の妹が勇氣と知恵を働かせて、窮地をのりこえ幸せをつかむという典型的な昔話。デ・ラ・メアの再話とエロール・ル・カイン



の絵が、子どもから大人まで楽しめる絵本に仕立てました。

親しい人や、恋人へのプレゼントに、心に響く絵本をとお考えの方に、次の2冊は打って付けです。

『ほらふきじゅうたん』(デイヴィッド・ルーカス・作 なかがわちひろ・訳 1470円 偕成社) 大理石でできた女の子フェイス(信じるという意味)は永い眠りから目覚めます。すると下の方から声が。それはじゅうたんでした。物語は2人の様々な会話で進みます。主に話



すのはじゅうたんで、それは夢物語か、真実か?少し黄色味を帯びた白を背景に、灰色がかった薄い黒のモノトーンの絵で描かれています。それはあたかも芝居をみるような感じで場面(お話)が展開されていきます。人間の真理が語られているのかな?

『あの路』(山本けんぞう・文 いせひでこ・絵 1575円 平凡社) これは遠い日の心の中の物語。母が亡くなって、少年は親戚に引き取られる。その通りで少年は、3本足の犬とであった。それが



てくれる絵本があるならば、これもその一冊に加えたい。

らはいつも少年と犬は心の通い合った友達だった。やがて少年は町を去るが、犬は、孤独な少年の心の奥に根付いて、何処までも、何時までも心の支えだった。

編集後記

まずはお詫びいたします。10月号、11月号とピッポ新聞を休刊してしまいました。本当にごめんなさい。出版社の休刊のお知らせは廃刊の意味ですが、本紙は店主が急げただけですから、この点はご安心を。2カ月の間に世の中が変わったなど言うつもりはありませんが、ダム工事ストップや沖繩の米軍基地の県外移転などといったいどうなるのだ!なにやら民主党政権の雲行きが怪しくなってきましたね。一方、「エコだエコだ」と叫びながら、税金を自動車会社に垂れ流すは、いい加減いしてほしいな。さて、ピッポの店内もカクタやカレンダーなどのクリスマス・お正月商品や絵本が所狭しと展示されていますよ。みなさまおお待ちしています。そうだ!大掃除などの折り、本の処分をお考えの方ご一報ください。お宅まで伺います。